

台湾 台中市と嘉義市の市区計画に関する研究

ー日本統治時代を中心としてー

Keywords

台中 嘉義 日本統治時代
復元 復興計画 市区改正計画

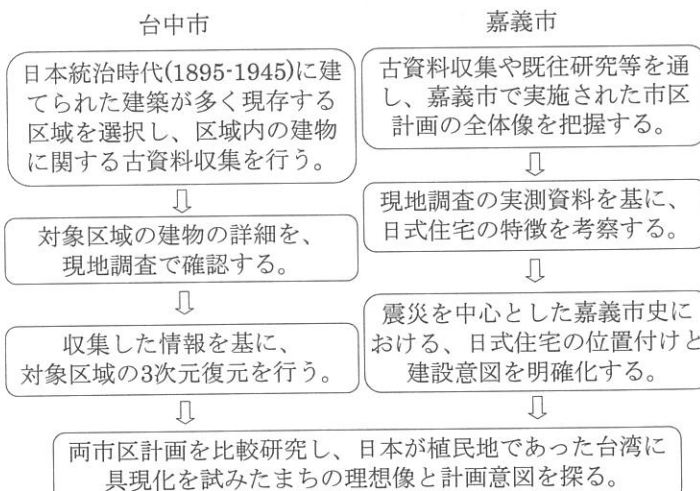
1. はじめに

1.1 研究背景と研究目的

かつて日本は50年に渡って台湾を統治し、武民化政策期(1895-1918)・同化政策期(1918-1936)・皇民化政策期(1936-1945)を通して植民地化を図った。そこで天災を機に日本の介入により都市の変遷を遂げた、台中市と嘉義市を調査対象都市とし、両都市で実施された植民地での市区計画を研究する。

本研究では台中市の日本統治時代の建築物を中心にまちなみ3次元復元をすることで市区計画を視覚化し、大震災を機に建設された日式住宅の実測調査等を通して、嘉義市の市区改正計画を明確化する。両都市の研究より、日本が台湾に具現化を試みたまちの理想像や計画意図を探ることを目的とする。

1.2 研究方法



1.3. 現地調査の概要



図1 現地調査の概要地図

2012年8月27日～9月2日の7日間、台湾で現地調査を行った。台中市では日本統治時代の建築物の現状確認と、台中第二消費市場の立面の調査や寸法等の計測を行った。また嘉義市では日式住宅の調査として、ヒアリングや実測調査、街区調査等を行った。



K09107 吉田 真希

2. 台湾概要

日本の東南方向約2,100kmに位置し、本島と複数の小島から成る台湾は、“麗しの島(Ilha Formosa)”とも呼ばれながらも、立地的条件から様々な国に貿易拠点として占領された歴史を有する(表1)。16世紀半ばには清朝との戦いに備え鄭成功が移住し、彼が実施した都市計画は日本統治時代初期の市区計画の基盤となった。それ以降の日本統治時代に、本省人は台湾に移住する日本人よりも高い伸び率で増加した(表2)。その後は再び中国の一部とされたが、現在は台北市を中心に経済が発展し民主化が行われている。

表1 台湾人口推移表

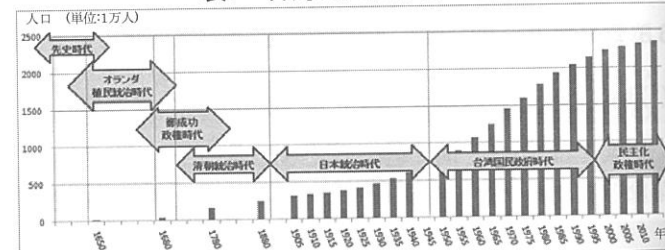
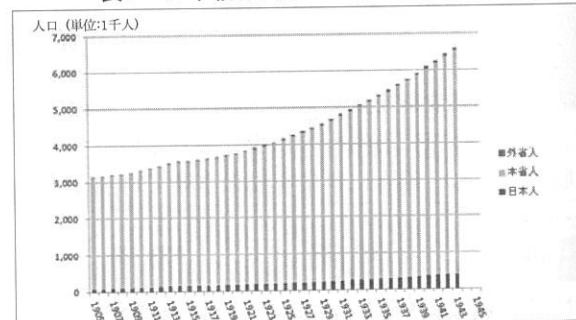


表2 日本統治時代人口推移内訳

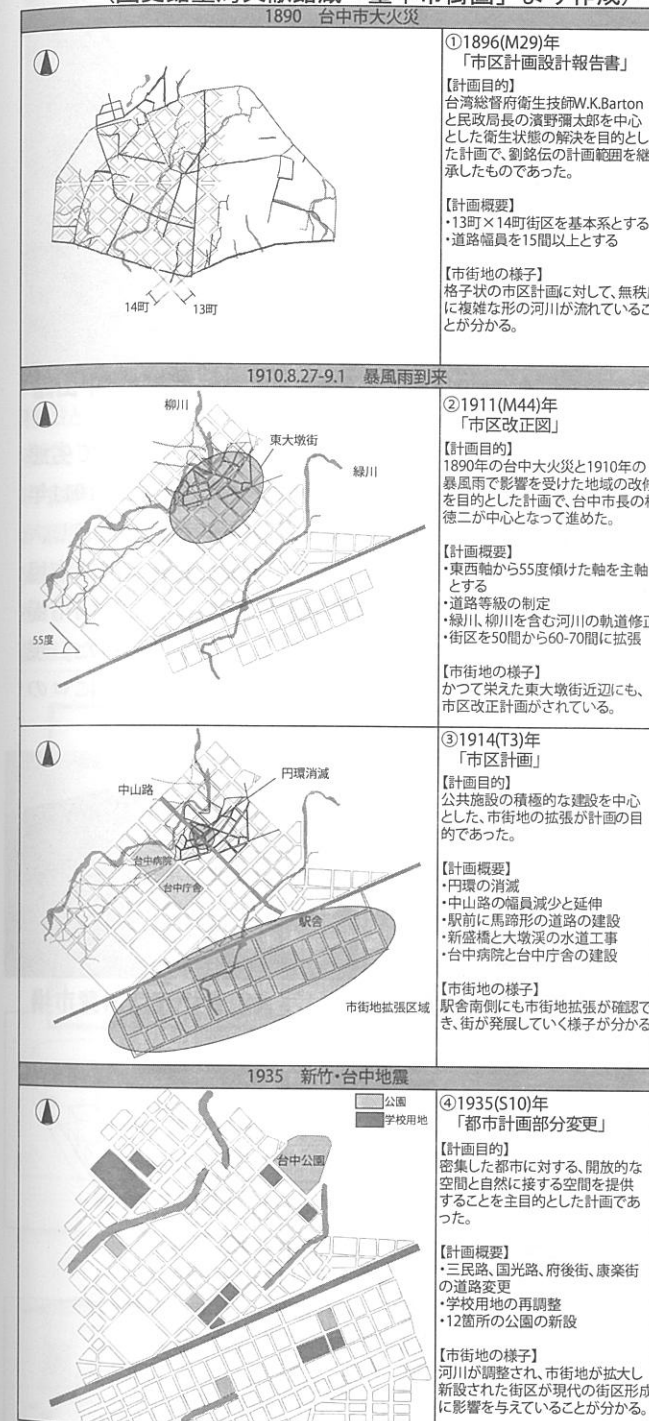


3. 台中市概要

3.1 市区改正計画

現在は台湾第三の経済規模を誇る台中市であるが、かつては“台湾一不健康な土地”とも称され、台湾府城の建設が頓挫し城内は荒地であった。1896年に渡台した、台湾総督府衛生技師W.K.Bartonの衛生環境調査の結果を基に市区計画が立案され、衛生環境改善後は火災や暴風雨からの復興、人口増加に伴う市区改正計画が数回に渡って行われた。そして格子状の区画整理を伴う計画により従来のまちとは様相が異なる、日本の植民地化政策を如実に反映した都市となった。

表3 台中市 市区形成計画図変遷
(國史館臺灣文獻館蔵「臺中市街圖」より作成)



3.2 建築物

日本統治時代の公共施設を中心とした建築物の一覧を表3に示す。日本の支配形態に応じて造られた建築物が、日本の威信を誇示する監獄等の公共建築から始まり、台湾の生活に即した学校建築等の公共建築へと移っている。また日本で関東大震災が発生した1923年頃を機に、構造形態も変化していることが分かる。このように公共施設建設は、日本本土の政策を生かし、かつ台湾総督府の市区計画意図を如実に示していることが分かった。

表4 日本統治時代建設の建築物一覧

建築年	現建物名称	旧建物名称	設計者	構造
1900	台中刑務所	台中監獄	台湾総督府	煉瓦造
1908	台中公園中ノ島休憩所	台中公園中正亭	福田東吾	木造
1911	台中第一消費市場	(焼失)	台湾総督府営繕課	煉瓦造
1913	台中州庁	台中市政府	台湾総督府	煉瓦造
1915	台中病院	省立台中病院	台湾総督府営繕課	煉瓦造
1915	台中信用金庫	三信商業銀行	不詳	煉瓦造
1917	台中第二消費市場	台中第二消費市場	台湾総督府営繕課	煉瓦造
1917	台中駅舎	台中駅	台湾総督府交通局	鉄骨造
1920	台中地方法院	台中地方法院	台湾総督府営繕課	煉瓦造
1920	台中市役所	市黨部	台中州土木課	煉瓦造
1920	台中郡役所	台中市警察署	台中州土木課	煉瓦造
1920	台中州立第一小学校	大同国小学校	台中州土木課	煉瓦造
1929	台中州立図書館	合作金庫銀行	不詳	RC造
1933	台中郵便局	台中郵便局	不詳	RC造
1934	商業学校	省立台中商專	台湾総督府	RC造
1934	高等女学校	台中女中学校	台湾総督府	RC造
1934	女子公学校	居仁国中学校	台湾総督府	RC造
1937	専売局台中支局	公売局第五酒廠	専売局営繕課	RC造
1938	彰化銀行本店	彰化銀行本店	白倉好夫・島山喜三朗	RC造

3.3 亭仔脚と中山路(旧鈴蘭街道)

台湾で頻繁に見られる亭仔脚(アーケード)は、日本統治時代に導入された。日射を遮り、亜熱帯気候であるがゆえに起こるスコールから住民の歩行環境を守ることが導入時の主目的である。1913年「台湾家屋規則」の規定に伴う台中市法整備により、同年に「台中市街地歩道規定」が公布され、台湾家屋建築を除く全ての建築物に亭仔脚の設置が義務付けられた。同規定から、亭仔脚は400mm×530mmの角柱を基本とすることが定められた。また亭仔脚は台湾の生活形態に合っていたため日本統治時代以降も好んで使用されており、木造や煉瓦造、コンクリート造など多様な材料で造られた亭仔脚が混同するまちなみが形成されることとなった。

台中駅から北西方向に伸びる中山路は、日式住宅とそれに付随した亭仔脚が立ち並ぶ通りであり、古写真から1920年代後半を境に木造日式住宅・亭仔脚と煉瓦造パロック日式住宅・亭仔脚が共存していることが分かった。

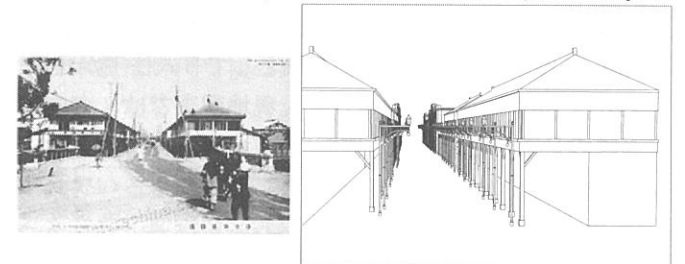


図2 木造日式住宅古写真・3次元復元図

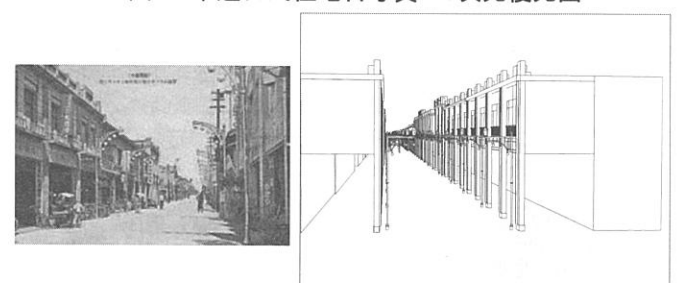


図3 煉瓦造日式住宅古写真・3次元復元図

(注)現存する建築には「復元」を用いるべきだが、失われた建築も多いので本稿では「復元」に統一する。

4. 嘉義市概要

4.1 市区改正計画

台中市と台南市の間に位置する嘉義市は、清朝統治時代に城壁が築かれ、城内を中心に広がったまちである。1906年に大震災が発生し、城内を中心に当時の主流であった土角造の家屋が59.1%倒壊した。台湾総督府は震災を機に城外に鉄道を通し、城内外を接続する道路を整備した。また1930年

1906 嘉義大震災
①1906-1911 「明治期第一市区改正計画」 【震災復興を中心とした市区改正計画】 ・舊堡目状と放射状の計画道路の整備 ・主要道路の幅員は一律30間とする
②1912-1919 「明治期第二市区改正計画」 【市街地の拡張と発展を目指す市区改正計画】 ・人口増加に伴う新市街地の拡張 ・嘉義-台南の道路の延伸
③1932-1935 「昭和前期市区改正計画」 【阿里山観光を含む観光都市を目指す市区改正計画】 ・嘉義市と他の郡間での産業道路の新設 ・嘉義駅中心の広場と水道管の拡張 ・法制定により主要道路に亭仔脚の設置が義務づけられる
1941 嘉義中埔震災
④1943-1945 「昭和後期市区改正計画」 【さらなる市街地の拡張を目指す市区改正計画】 ・人口増加に伴う新市街地の拡張 ・財政状況の逼迫のため道路工事が中心となる

表5 嘉義市における市区改正計画
代前半には嘉義市近郊の阿里山森林が開拓され、良質な木材を利用した木造の日式住宅が嘉義市内に誕生した。

嘉義市ではこのような立地条件を有効に生かし、震災に強い住宅づくりを中心とした市区改正計画が長年に渡って実施されてきた。

5. 現地調査の結果と考察

5.1 台中市

5.1.1 日本統治期の建築物と街並み

日本統治時代の建築物は大半が現存しており、用途変更せず使用しているものが多かった。市区計画当初は成功路・中正路・中山路・民族路の4つの通り沿い（方向A）に市場や公共施設を配置する計画であった。しかし中正路と駅舎の間には台中病院が立地していたため、民権路を市区計画の主軸としたが、台中病院の移転により中正路が計画の主軸となった。後に日本人が台湾に居住し始めると、北東-南西軸を主軸として日式住宅が建設されるようになった（方向B）。現地調査では、方向Bに多くの日式住宅の現存が確認できた。

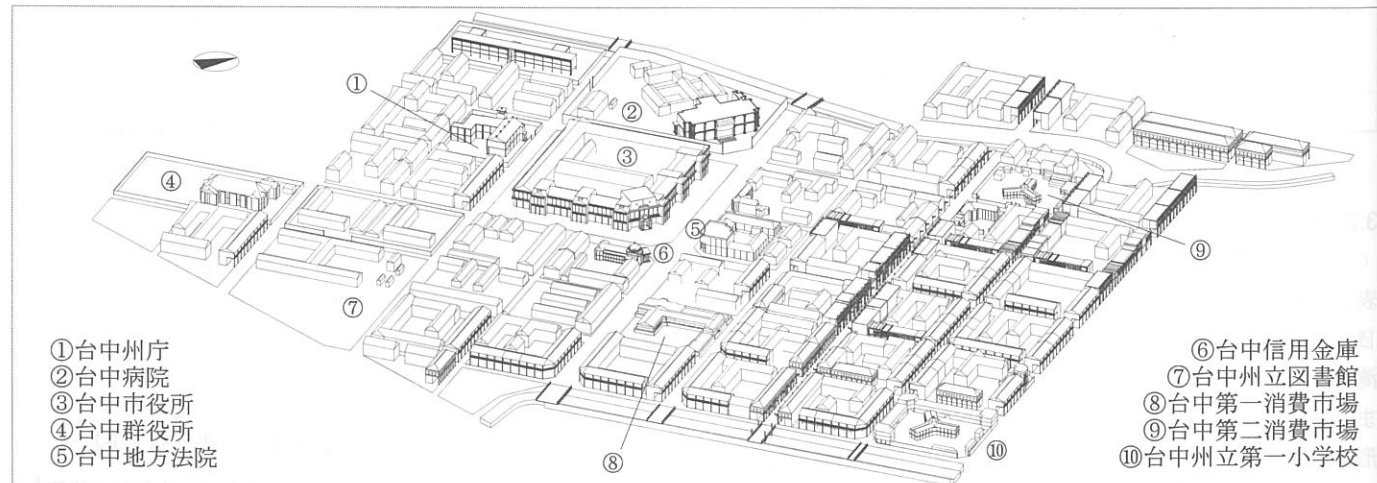


図4 台中駅前地図

写真1 中山路

5.1.2 市場建築

当初台中に存在していた市場は衛生状態が極めて劣悪であったため、日本人により使用が禁止された。1911年に衛生状態の改良を施した台中第一消費市場が完成し、人口増加に対応して1917年にはさらに台中第二消費市場が建設された。台中第一消費市場は焼失したが、両市場の本館はY字形で中央に尖塔形をした楼閣があった。現存する台中第二消費市場は、本館を覆い隠すように口の字型の店舗建築が増築されていた。

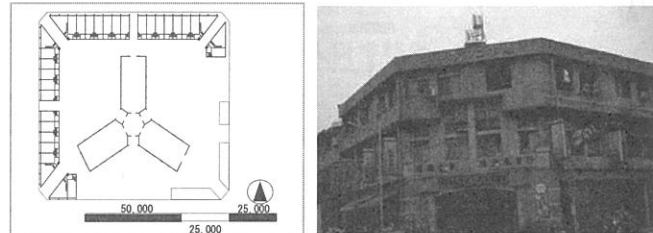


図5 台中第一消費市場平面図 写真2 台中第二消費市場

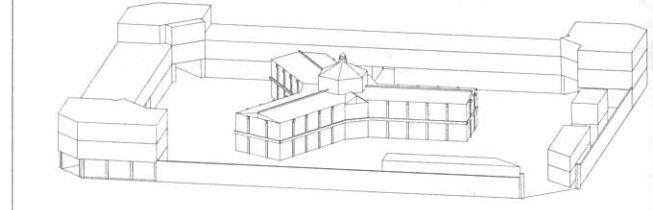


図6 台中第一消費市場 3次元復元図
図7 台中市鳥瞰 3次元復元図(1930年代)

5.2 嘉義市

5.2.1 日式住宅

日式住宅は台湾の亜熱帯気候に適していたため、現在も好まれて使用されている住宅である。嘉義市は多くの日式住宅が現存する地域であるため、図8・9に示す日式住宅の実測調査を行った。

黄氏邸は約80年前に建設され、当初の用途は不明であるが、現在の所有主が入居した際は1階を医院、2階を住居として使用していた。日本住宅と中国住宅の折衷様式でもある黄氏邸は、日本住宅の特徴として欄間等の装飾や襖、畳があることが挙げられる。また日本住宅では確認できない、中国住宅の特徴として左右対称の造りや、半割の力束が竹で結ばれていること、肘木や斗を使用した架構であることが挙げられる。さらに台湾独自の日式住宅に付加されている特徴として亭仔脚が設置されていること、日本統治時代以後の中国社会の治安問題に対する閉鎖性を持つことが挙げられるが、実測調査を行った黄氏邸も例外ではなく、幅が12尺の亭仔脚が4脚設置されていた。

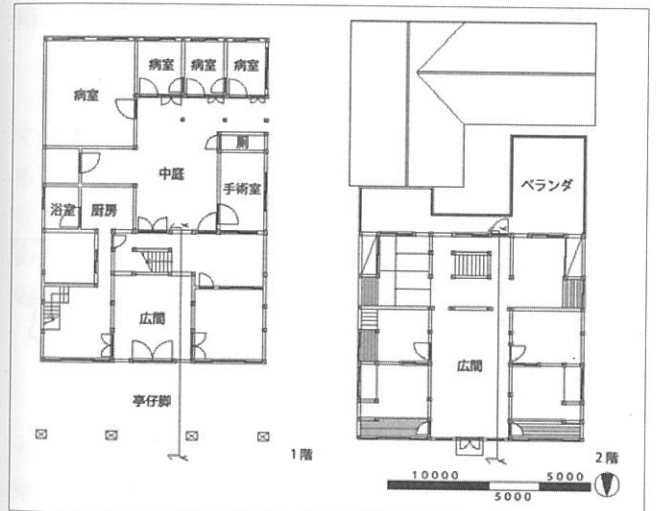


図8 日式住宅平面図

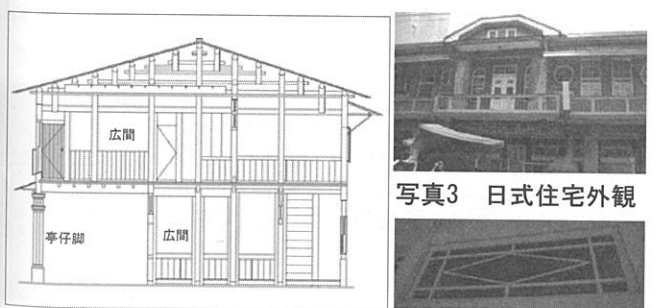


図9 日式住宅y方向断面図 写真3 日式住宅外観

5.2.2 街区調査

嘉義市の市区改正計画は日本統治時代以前に建設された城壁跡を意識して実施された。そこで本調査では2011年夏に実施された旧城内の街区調査を補完する目的で、旧城外を中心に街区調査を行い、市区改正計画で整備された旧城内外の街区の様子を明らかにすることを目的とした。

台鉄嘉義駅正面から市街地に伸びる市区改正道路に接続する円環を中心にして、グリッド状の道路が存在する。旧城内外ともに街区外周は日本統治時代に建設された形状であり、街区内部を通る道路は日本統治時代以前から存在していたもので、さらにその道路に沿って日式住宅が多く現存していることが判明した。しかし旧城内は市役所や市場等の公共施設があり、旧城外には相対的に市区改正道路ではない通りが多く存在していることが違いである。また嘉義市では震災の影響により厳しい建築規則が設けられていたため、丈夫な構造を持つ住宅が集まる街区が多かった。

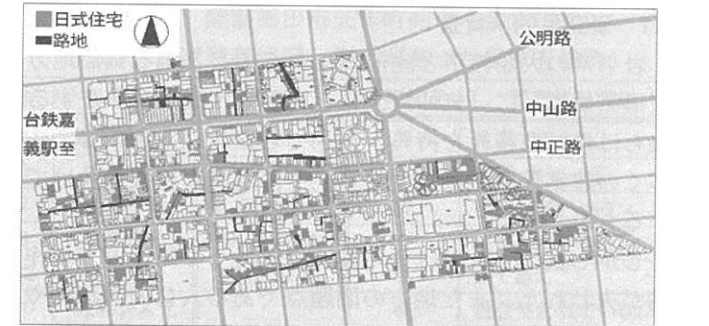


図10 旧城外街区調査結果

6. 総括

両都市の市区改正計画等の研究から、日本統治時代初期は日本の軍勢力を誇示するような計画や公共建築の建設が行われたといえる。そして時代が経て台湾総督府は台湾を単なる植民地としてではなく、抜本的な衛生環境整備や市区改正計画を通して一つの都市として発展させようと植民地計画を変容させた。これは台中市の3次元復元研究からも視覚的に判断できる。また現代にも日式住宅や亭仔脚が台湾人の生活様式に根強く残っている点から、日本は植民地政策を通して台湾に近代化をもたらしたといえる。

日本統治時代当初の市区改正計画には清朝時代の計画が基盤となったものもあり、複数の国から支配され発展してきた台湾特有のまちづくりが現代にも脈々と受け継がれているといえる。日本統治時代に台湾に具現化を試みたまちの理想像と計画意図を、台中市と嘉義市の市区計画の変遷を辿ることから明確化できたことは本研究の大きな成果である。

参考文献

- 『日治時期臺灣都市発展地圖集』
2006年 黄武達編著 南天書局有限公司 國史館臺灣文獻館蔵
- 『1945年以前台中地域空間形式之轉化 一個政治生態群的分析』
1991年 賴志彰著 國立臺灣大學建築與城鄉研究所碩士論文
- 『圖繪復原的嘉義市街生活歷史變遷』
2008年 師嘉瑀著 國立臺南大學文化研究所碩士論文
- 『日治時代に於ける台湾諸都市の都市形態に関する研究』
2008年度 芝浦工業大学大学院修士論文 安原賢司
- 『台湾史研究入門』2004年 林玉茹著 汲古書院出版
- 『臺灣教育雑誌と台湾建築会紙画像データベース』
URL: <http://192.192.13.178/cgibin/gfb3/jjournal.cgi?o=djjournal>